

立木観音

ここに祀られている千手観音は、立木観音として知られ、日光で最も古い仏像である。日光山として知られている神社と寺院の複合体で初期の寺院のほとんどを設立した勝道上人（735-817）によって彫られた。勝道上人は、桂の立ち木に彫刻したと伝えられている。彫像には足がなく、衣服の裾は彫像の基部にある木の根元に消えている。

観音は仏教の重要な仏様であり、しばしば慈悲の菩薩と呼ばれている。観音菩薩はすべての人々の願いを聞き、苦しんでいる人々を助けると言われている。観音菩薩は、状況に応じて人々を救うために多くの姿で現れることができる。

千手観音は、輪王寺の三体の主要な仏様の1つであり、輪王寺がその一部をなしている中禅寺の御本尊である。千手観音は、神としての男体山の本地仏である。

「千手観音」と呼ばれているが、この像には仏自身の腕2本の他に40本の腕がある。これらの腕のほとんどは別々に彫刻され、彫像の本体に結合された。各手は、印相を表しており、悪との戦いや助けになる仏具を有している。腕の一本一本は25の願いを聞き届け、合計1,000の願いを聞き届けることができると言われている。彫像には11の頭がある。下部の10頭は悟りを得るために必要な10の段階を表し、中央の最上部にある11番目の頭は悟りの境地を表している。この11番目の頭は、通常、西方極楽浄土の阿弥陀如来を表している。